

大阪学院大学  
外国語論集  
第79号

LI構文の派生とその理論的帰結 (3)

…………… 川 本 裕 未 1

研究ノート

Language Selection in Multilingual Speech Production

…………… E. Russell Sanford III 23

2020 年 6 月

大阪学院大学外国語学会



大阪学院大学  
外国語論集  
第79号

2020年6月

大阪学院大学外国語学会



## LI 構文の派生とその理論的帰結 (3)

川 本 裕 未

### 4.3 Do-support を受けないことについて

川本 (2019a) は、LI 構文における前置された場所句は、主語および話題化された要素の両方の特性を持つことから、SPEC-T に A 移動後、TP の外側へ A-bar 移動していると主張した。さらに、川本 (2019b) では、LI 構文の場所句が A 移動後、TP の外側の着地点として TopicP の指定部に A-bar 移動すると仮定することによって、1) 既知情報である、2) 主語節内での適用が許されない、3) ECM 補文内での適用が許されない、といった話題化された要素との共通点が極小主義理論に基づいて説明されるとともに、話題化された要素が弱交差を許さないのに対して、LI 構文の場所句が弱交差を許すという話題化要素との相違点も説明されることを示した。

本稿では、LI 構文の場所句が主語と同じ特性を示す点に関して極小主義理論に基づいた原理的説明を試みる。検討するのは、川本 (2019a) で提起した LI 構文の場所句の分布特性のうち、主語との共通点を示す以下の点である。

- (73) a. Do-support を受けない
- b. that・痕跡効果を受ける
- c. 演算子の作用域に偏りがある

上記のうち、まず本節では (73a) の LI 構文の場所句が主語同様、Do-support を受けないという点に関して議論する。

T head に含まれる時制素性は動詞的要素に付加しなければならないという特性を持つ。(74a) の T のように間に他の主要部が介在することなく、C 統御領域内の直ぐ下に動詞があればその動詞に付加して (74b) が派生される。

(74) a. John [T<sub>[T:Past]</sub>] buy an SUV.

b. John bought an SUV.

しかし、T と動詞 buy の間に否定辞の not が位置する (75a) のように、T と動詞の間に他の主要部が介在する場合、(75b) のように動詞的な要素として助動詞の do が挿入される。これが Do-support である。その結果 (75c) が派生される。

(75) a. John [T<sub>[T:Past]</sub>] not buy an SUV.

b. John [T<sub>[T:Past]</sub>-do ] not buy an SUV.

c. John did not buy an SUV.

Do-support に関して主語と目的語の非対称性が観察されるのが、疑問詞を用いた疑問文である。目的語を wh 疑問詞化した場合 Do-support の適用が義務的であるのに対して、主語を wh 疑問詞化した場合は Do-support の適用はできない。

(76) a. Which player did Naomi defeat?

b. \*Which player Naomi defeated?

c. \*Did which player Naomi defeat?

(77) a. \*Which player did win the game? (did は無強勢)

b. Which player won the game?

c. \*Did which player win the game?

C head は解釈不可能な<sup>10</sup> 時制素性と先端素性 (Edge feature)<sup>11</sup> を持っており、それらは値を決めることのできる解釈可能な素性を持つ要素を SPEC-C と C head 自身に誘引することによって削除されなければならない。which player が文頭に来ていない、すなわち SPEC-C に来ていない c 文がいずれも非文なのは、C が持つ解釈不可能な先端素性を削除できずにいるからである。

(76a-c) のように目的語が wh 素性を持っている場合、C の解釈不可能な時制素性と先端素性を削除する最も経済的な方法は以下のとおりである。T の先端素性が vP 内から DP の Naomi を SPEC-T に誘引し、その  $\phi$  素性の値を写し取ることで、自身が持つ解釈不可能な  $\phi$  素性を削除する。そして同時に T によって Naomi に主格が与えられる<sup>12</sup>。

(78) [TP Naomi <sub>{Case:Nom}</sub> [ $\phi$ :3S] [T <sub>{Edge}</sub> [T:Past] [ $\mu\phi$ :3S]] [<sub>vP</sub> Naomi defeat which player <sub>{\phi:3S}</sub> [wh]]]<sup>13</sup>

さて、以下の例文の補文主語が示すように、主格名詞句は時制節にしか現れない。つまり、主格は常に時制節と関連していると言える。

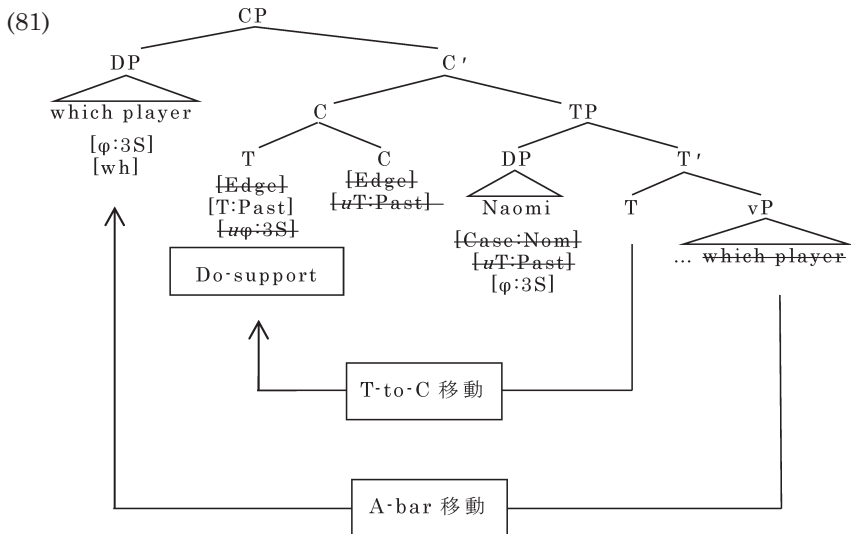
- (79) a. It is important that he should go at once.  
 b. \*It is important that him should go at once.  
 c. It is important for him to go at once.  
 d. \*It is important for he to go at once.

このことから、T が SPEC-T の DP に主格を与える際、その主格と関連づけられた解釈不可能な時制素性が主格 DP に付与されると仮定する<sup>14</sup>。したがって、(78) は正しくは (80) の構造となる。

(80) [TP Naomi <sub>{Case:Nom}</sub> [ $\mu$ T:Past] [ $\phi$ :3S] [T <sub>{Edge}</sub> [T:Past] [ $\mu\phi$ :3S]] [<sub>vP</sub> Naomi defeat which

player<sub>[φ:3S] [wh]]</sub>

(76a-c) の CP 階層では C の持つ解釈不可能な時制素性が、時制の値を持つ解釈可能な素性 [T:Past] を持つ T を C に移動させ、Past の値を写し取ることによって削除される。時制素性の [T:Past] はその C 統御領域内の直ぐ下に動詞の要素を必要とする。ところが、時制素性は C に移動したため動詞と離れてしまっている。そこで Do-support によって助動詞 do が挿入され、did として具現化した (76a) が派生される。さらに、C の持つ先端素性が、wh 素性を持つ目的語 which player を SPEC-C に誘引することによって削除される。



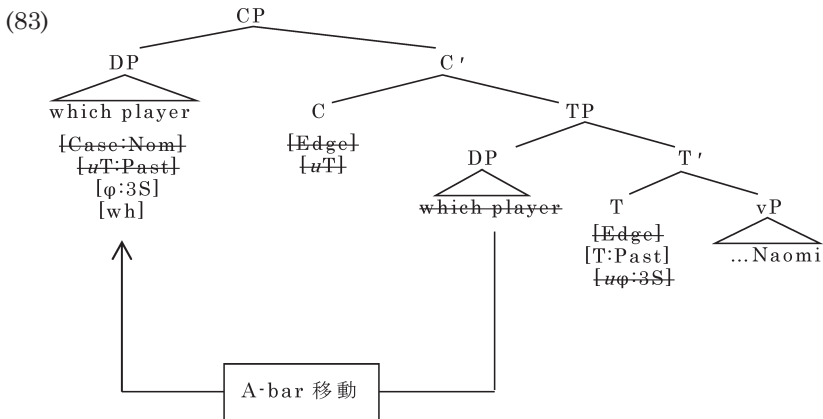
つまり、目的語が wh 疑問詞化された場合、T-to-C 移動と A-bar 移動が起こり、T-to-C 移動によって語彙的要素から離れてしまった T head に含まれていた時制素性に Do-support が適用されることになる。

一方、which player が主語である (77a-c) では、T の持つ解釈不可能な φ 素

性が **which player** を vP 内から SPEC-T に誘引し、**which player** の持つ  $\phi$  素性の値を写し取ることで削除されると同時に、T によって **which player** に主格が与えられる。注目すべきは (77a-c) の **which player** は主格の格素性に関連付けられた時制素性ととも **wh** 素性も持っていることである。

- (82) [<sub>TP</sub> **which player** [<sub>Case:Nom</sub>] [<sub>uT:Past</sub>] [ $\phi$ :3S] [**wh**] [<sub>T</sub> [<sub>Edge</sub>] [<sub>T:Past</sub>] [<sub>tr $\phi$ :3S</sub>]]  
 [<sub>vP</sub> **which player** defeat Naomi [ $\phi$ :3S]]]

CP 階層に入ると、C が持つ解釈不可能な時制素性と先端素性は値を決めることのできる素性を持っている要素をそれぞれ自身の領域に誘引することになるが、(76a-c) と異なり、この場合 **which player** が **wh** 素性と時制素性の両方を持っていることから、**which player** を SPEC-C に A-bar 移動させるだけで、C の持つ先端素性と時制素性の削除が達成されることになる。つまり、時制素性を持つ T を別個に誘引して Do-support に結びつけることは、必要のない操作として経済性の原理に反することになる。したがって、T-to-C 移動は起こらずそれ故に Do-support も発生しない。



さて、LI 構文に目を向けるなら、その場所句を疑問詞化して **wh** 疑問文を作った場合、以下に示すように主語と同様、Do-support が起こらない。

- (84) a. \*On which stage did appear the famous singer? (did は無強勢)  
 b. On which stage appeared the famous singer?  
 c. \*Did on which stage appear the famous singer?

(84c) は (76c) や (77c) と同じく、**wh** 素性を持つ **on which stage** が文頭、つまり SPEC-C に来ていないことから C が持つ先端素性を削除できていないため非文となっているとして、では、(84a-b) の文法性の違いはどのような派生過程によってもたらされているのだろうか。この疑問も、LI 構文の場所句が SPEC-T を経由していると仮定することによって、以下のように自然な説明を与えることができる。

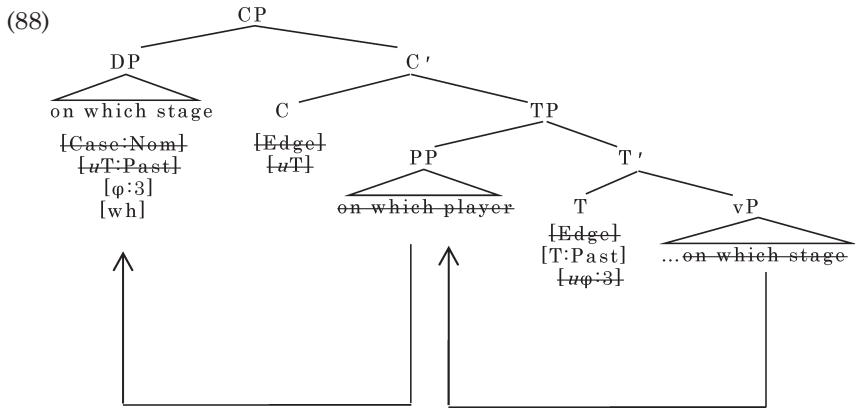
T は先端素性を持っており、SPEC-T が語彙的要素によって埋められることを要求する。この要求を満足させる方法として、(84) の **appear** のように外項を持たない非対格動詞を使用した文で場所句を疑問詞化した疑問文を作るのには、(85a) の **the famous singer** のような内項を SPEC-T に繰り上げる、または、LI 構文に関する川本 (2019a) の提案にしたがうなら (85b) の **on the stage** のような場所句を SPEC-T に繰り上げる (LI 構文)、または (85c) のように虚辞の **there** を SPEC-T に融合する (**there** 構文)、という3通りが可能である。

- (85) a. [<sub>TP</sub> The famous singer <sub>{Case:Nom} [trT:Past] [<sub>φ:3S</sub>] [<sub>T</sub> <sub>{Edge} [T:Past] [trφ:3S]</sub>]  
     [<sub>VP</sub> appear ~~the famous singer~~ on which stage [<sub>φ:3</sub>] [wh]]]  
 b. [<sub>TP</sub> On which stage <sub>{Case:Nom} [trT:Past] [<sub>φ:3</sub>] [wh] [<sub>T</sub> <sub>{Edge} [T:Past] [trφ:3S]</sub>]  
     [<sub>VP</sub> appear the famous singer [<sub>φ:3S</sub>] on which stage]]  
 c. [<sub>TP</sub> There <sub>{Case:Nom} [trT:Past] [<sub>φ:3</sub>] [<sub>T</sub> <sub>{Edge} [T:Past] [trφ:3S]</sub>] [<sub>VP</sub> appear the famous  
     singer [<sub>φ:3S</sub>] on which stage [<sub>φ:3</sub>] [wh]]]<sup>15</sup></sub></sub></sub>

SPEC-T に移動した (85a) の *the famous singer* と (85b) の *on which stage*、および SPEC-T に融合した (85c) の *there* は、T によって主格が与えられ、その主格と関連づけられた解釈不可能な時制素性が付与される。派生が CP の階層に達すると、(85a) と (85c) では C が持つ解釈不可能な時制素性が、解釈可能な時制素性を持つ T を C に誘引し削除される。さらに、C の先端素性が、wh 素性を持つ *on which stage* を SPEC-C に誘引して削除される。その結果、動詞と引き離された T に Do-support がかかり、(85a) と (85c) はそれぞれ (86a) および (86b) を経て、(87a-b) として具現化する。

- (86) a. [<sub>CP</sub> On which stage [<sub>φ:3</sub>] [wh] [<sub>C</sub> did [<sub>T:Past</sub>] [<sub>trT:Past</sub>] [<sub>Edge</sub>]] [<sub>TP</sub> the famous singer [<sub>Case:Nom</sub>] [<sub>trT:Past</sub>] [<sub>φ:3S</sub>] appear ~~the famous singer on which stage~~]]?  
 b. [<sub>CP</sub> On which stage [<sub>φ:3</sub>] [wh] [<sub>C</sub> did [<sub>T:Past</sub>] [<sub>trT:Past</sub>] [<sub>Edge</sub>]] [<sub>TP</sub> there [<sub>Case:Nom</sub>] [<sub>trT:Past</sub>] [<sub>φ:3</sub>] appear the famous singer [<sub>φ:3S</sub>] ~~on which stage~~]]?  
 (87) a. On which stage did the famous singer appear?  
 b. On which stage did there appear the famous singer?

一方 LI 構文の派生は以下のようになる。(85b) では TP 階層で場所句が SPEC-T に入り、T によって場所句に主格と関連づけられた解釈不可能な時制素性が与えられる。派生が CP 階層に入ると、C が持つ解釈不可能な時制素性と先端素性は、それぞれの値を決めることのできる素性を持っている要素を自身の領域に誘引しなければならないが、場所句 *on which stage* は時制素性と wh 素性の両方を持っており、これを SPEC-C に誘引するだけで C の持つ解釈不可能な時制素性と先端素性の削除が達成されることになり、Do-support は起こらない。



以上のような派生過程を経て、LI 構文の **wh** 疑問文 (84b) が派生される (89) として再録)。

(89) On which stage appeared the famous singer?

重要なことは、(89) で Do-support が適用されないという事実を説明するためには、場所句 **on which stage** が一旦 SPEC-T に着地すると仮定することである。場所句は SPEC-T に入ること、T から主格と時制素性を獲得し、SPEC-C に移動後 C の時制素性を削除し、Do-support を回避するのである。

#### 4.4 that・痕跡効果を受けることについて

LI 構文の場所句は補文から抜き取って主節に移動させることが可能である。

(90) a. Into the room Terry claims walked a bunch of gorillas.

b. Into which room does Terry claim walked that bunch of gorillas?

(Culicover and Levine 2001)

しかしながら、補文の C head に補文標識の *that* が入っていると、場所句の補文からの抜き取りは許されない。

- (91) a. \*Into the room Terry claims that walked a bunch of gorillas.  
 b. \*Into which room does Terry claim that walked that bunch of gorillas?

(Culicover and Levine 2001)

これは、次の (92a-b) が示すように補文内の主語の抜き取りが、補文 C に *that* がなければ可能であるのに対し、補文 C に *that* があると不可能になるという事象と並行的である。

- (92) a. Who do you think read the book?  
 b. \*Who do you think that read the book?  
 c. What do you think John read?  
 d. What do you think that John read?

(92c-d) が示すように補文内の目的語の抜き取りは *that* の有無に関係なく可能である。目的語の抜き取りは *that*・痕跡効果を免れるのに対して、主語、および LI 構文の場所句の抜き取りは *that*・痕跡効果を受けて、C head に *that* が入っていると、その *that* を越えて移動をすることができないのはなぜであろうか。

補文内の *wh* 句は補文の SPEC-C を経由して、順次上位の循環へ連続循環的に移動し文頭に到達すると考えられることから、英語の補文 C は (EPP 素性を伴う) 先端素性を持っていると考えることができる (したがって *wh* 素性を持つ要素をその指定部に誘引する)。一方、(93a-d) が示すように、補文内では主語・助動詞倒置が起こらないことから、補文 C は主文 C と異なり、一

見すると解釈不可能な時制素性を持たないように見える。

- (93) a. John wonders [if Mary bought the car yesterday].  
 b. John wonders [what Mary bought yesterday].  
 c. \*John wonders [did Mary buy the car yesterday].  
 d. \*John wonders [what did Mary buy yesterday].

しかしながら、川本 (2019b) で挙げたように、アイルランドで話されている英語変種の Hiberno-English では補文内の T-to-C 移動が観察される。  
 (McCloskey (1992), Henry (1995))

- (94) a. I wondered [would I be offered the same plate for the whole holiday].

Roddy Doyle: *The Woman Who Walked into Doors*, 154

- b. She asked the stewards [was any member of the committee in the hall].

James Joyce: *Dubliners*, 170

- (95) a. The baritone was asked [what did he think of Mrs Kearney's conduct].

James Joyce: *Dubliners*, 176

- b. You'd be better off asking [why did he marry me].

Frank McGuinness: *Dolly West's Kitchen*, 55

このことから、英語の補文 C は解釈不可能な時制素性を持つと考えられる。  
 但し、Hiberno-English の補文 C が持つ時制素性は EPP 素性を伴うため時制

(92a-b) の *wh* 句は補文 SPEC-T にあるため T によって主格を与えられ、それに伴い解釈不可能な時制素性も持つことになる (4.3節参照)。一方 (92c-d) の *wh* 句は主格を付与されないので時制素性を持たない。そして、いずれの *wh* 句も補文 C の先端素性によって SPEC-C に誘引される。補文 C の解釈不可能な時制素性は EPP 素性を持たないので語彙要素の誘引ではなく、解釈可能な時制素性を持つ要素との一致 (Agree) 関係を通して削除される。つまり、(92c-d) では、補文 C は T の時制素性と一致の関係を結び、その値を写す。C に写し取られた時制が *Present* や *Past* といった定形 (*finite*) の値であれば補文標識として *that*、もしくは音声形式のない補文標識 (*phonologically null complementizer: NC*) が融合し、もし時制の値が非定形 (*nonfinite*) であれば *for* が融合すると仮定する<sup>16</sup>。

- (96) a. What do you think [that we should do]?  
b. What do you think [NC we should do]?  
c. What is it necessary [for us to do]?

以上の派生を (92c-d) に適用するなら、その補文 CP は以下のように表される。

- (97) [CP what<sub>[wh]</sub> [C<sub>{uT:Past} [Edge]</sub> [TP John<sub>{Case:Nom} [uT:Past] [φ:3S]</sub> [T<sub>{Edge} [T:Past] [uφ:3S]</sub>]]  
 $\uparrow$   
that /NC  
[<sub>VP</sub> John read what]]]

(92a-b) は以下のように表される。

- (98) [CP **who** {Case:Nom} {trT:Past} [φ:3S] [wh] [C {trT} {Edge}] [TP **who** [T {Edge} [T:Past] {trφ:3S}] [vP **who** read the book]]]

(97) では C の持つ *uT* は Agree を通じて T の持つ Past の値を写し取るため、C には補文標識として *that*、もしくは音声形式のない補文標識 NC が融合する。一方、(98) では、T から主格と解釈不可能な時制素性を与えられた *who* が C の先端素性によって SPEC-C に誘引されるため、これにより C は先端素性と時制素性の削除が達成されることになるが、この場合の C の時制素性は、T の解釈可能な時制素性との Agree を通じてその値を写し取ったわけではないので、補文標識の融合は起こらない。

一方、LI 構文の場所句も (91a-b) が示すように *that*・痕跡効果を受ける。これも、場所句が SPEC-T を経由して補文 TP の外へ移動すると仮定することで、主語と同様に説明することができる。場所句が補文 SPEC-T に入ると仮定するなら、(91a-b) の補文 CP の派生は次のように表すことができる。

- (99) a. [CP **into the room** {Case:Nom} {trT:Past} [φ:3S] [topic] [C {trT} {Edge}] [TP **into the room** [T {Edge} [T:Past] {trφ:3S}] [vP **walk a bunch of gorillas into the room**]]]  
 b. [CP **into which room** {Case:Nom} {trT:Past} [φ:3S] [topic] [wh] [C {trT} {Edge}] [TP **into which room** [T {Edge} [T:Past] {trφ:3S}] [vP **walk that bunch of gorillas into which room**]]]

(99a) の *into the room*、(99b) の *into which room* は、補文 SPEC-T に一旦入り、そこで解釈不可能な時制素性を与えられる。前者は Topic 素性を、後者は Topic 素性と *wh* 素性をそれぞれ持つため、C の先端素性によって SPEC-C に誘引される。C はその指定部に置いた場所句の持つ素性によって先端素性と時制素性の削除が達成されるが、この場合、C の時制素性は T の解釈可能な時制素性の値を写し取ることなく削除されるので、補文標識の融合は起こらない

のである。

ここでも決定的に重要なことは、(99a-b) が示すように LI 構文の場所句が *that*・痕跡効果を受けるという事実を説明するためには、場所句が一旦 SPEC-T に着地すると仮定することであることに注目されたい。

#### 4.5 演算子の作用域に偏りがあることについて

次の (100) のように複数の演算子を含む文はそれぞれの演算子の作用域の相対的な大きさに応じて (101a-b) の2通りの解釈が可能である。

(100) Someone loves everyone.

(101) a.  $\exists x \forall y$  love ( $x, y$ )

(There is some person  $x$  such that  $x$  loves every person.)

b.  $\forall y \exists x$  love ( $x, y$ )

(For every person  $y$ , there is some person who loves  $y$ .)

演算子は節単位で作用域が評価されるとするなら、(100) の派生において TP 内で *someone* が *everyone* を C 統御するため、*someone* が *everyone* よりも広い作用域を持つ (101a) の解釈を得ることができる。

(102) [<sub>TP</sub> someone [<sub>VP</sub> **someone** loves everyone]]

さらに、C の先端素性によって引き起こされる移動によって作用域効果がもたらされるとするなら、*everyone* が *someone* よりも広い作用域を持つ (101b) の解釈は、C の持つ先端素性が *everyone* を SPEC-C に誘引することによって得られる。

(103) [<sub>CP</sub> everyone [<sub>TP</sub> someone [<sub>VP</sub> **someone** loves **everyone**]]]

目的語を **wh** 句のような演算子に変えても同様に2通りの解釈が可能である。

- (104) a. Who does everyone love?  
 b. John loves Mary, Bill loves Jane, and Tom loves Cathy.  
 c. Everyone loves Mary.

(104a) の質問において **everyone** の作用域が **who** の作用域よりも広いと捉えるなら (104b) の答えになるし、逆に **who** の作用域が **everyone** のそれよりも広いと解釈するなら (104c) の答え方になる。それぞれの解釈は以下の派生構造から得られる。

- (105) a. [<sub>TP</sub> everyone [<sub>vP</sub> **everyone** love **who**]]  
 b. [<sub>CP</sub> **who** does [<sub>TP</sub> everyone [<sub>vP</sub> **everyone** love **who**]]]

(105a) では TP 内で **everyone** が **who** を C 統御しているので **everyone** が **who** よりも広い作用域を持つ。派生が CP 階層まで進むと C の先端素性が **wh** 素性を持つ **who** を誘引するため、(105b) が示すように、SPEC-C に上昇した **who** が **everyone** を C 統御し、**who** が **everyone** よりも広い作用域を持つことになる。

ところが、(106a) のように主語が **wh** 句演算子になっていると、その疑問文に対する答えとして (106b) は不適切で、(106c) の答え方のみが可能である。

- (106) a. Who loves everyone?  
 b. \*John loves Mary, Bill loves Jane, and Tom loves Cathy.  
 c. John loves everyone.

(106a) は **who** が **everyone** よりも広い作用域を持つ解釈しか持たないのである。これは以下のように説明される。(106a) は TP 階層では以下のように、

(107) [TP who [<sub>VP</sub> ~~who~~ loves everyone]]

who が everyone を C 統御しているので、who が everyone より広い作用域を持つ解釈が得られる。この TP に C が融合し、その先端素性が wh 素性を持つ who を指定部に誘引するので、以下の構造が出来上がる。

(108) [CP who [TP ~~who~~ [<sub>VP</sub> ~~who~~ loves everyone]]]

この CP 階層においても who が everyone を C 統御しているので、結果として who が everyone より広い作用域を持つ解釈しか得ることができないのである。

LI 構文の場所句も主語と同様に1つの解釈しか許さない。LI 構文 (109) は (110b) の解釈は許さず、(110a) の解釈しか持たない。

(109) In some pigeonhole was lying every letter.

(Den Dikken 2006)

(110) a.  $\exists y \forall x$  lying in ( $x, y$ )

(There is some pigeonhole  $y$  such that every letter was lying in  $y$ .)

b.  $\forall x \exists y$  lying in ( $x, y$ )

(For every letter  $x$ , there is some pigeonhole which  $x$  was lying in.)

LI 構文の場所句が一旦 SPEC-T に入ると仮定するなら、(109) の TP 階層は以下ようになる。

(111) [TP In some pigeonhole [<sub>VP</sub> lying every letter ~~in some pigeonhole~~]]

in some pigeonhole が every letter を C 統御しているので、some pigeonhole

が every letter より広い作用域を持つ解釈が得られる。さらに、TP に融合した C の先端素性が Topic 素性を持つ in some pigeonhole を指定部に誘引するので、以下の構造が出来上がる。

- (112) [<sub>CP</sub> in some pigeonhole [<sub>TP</sub> ~~in some pigeonhole~~ [<sub>VP</sub> lying every letter in some pigeonhole]]]

CP 階層においても in some pigeonhole が every letter を C 統御しているので、その結果、in some pigeonhole が every letter より広い作用域を持つ解釈しか得ることができないのである。

ここでも注目すべきは、LI 構文の場所句の作用域の解釈に関する事実を適切に説明する際、決定的な役割を担っているのが場所句が一旦 SPEC-T に入っているという仮定である。

(「LI 構文の派生とその理論的帰結 (4)」に続く)

#### 注

- 10 解釈不可能素性とは意味的貢献をしない素性をいう (Chomsky 1995)。例えば、DP が持つ  $\phi$  素性 (人称、性、数等の文法素性) は意味解釈に関与するため解釈可能素性であるが、T が持つ  $\phi$  素性はなんら意味解釈に貢献しないという点から解釈不可能素性である。Chomsky (2001, 2008) では、解釈可能素性は値を持って派生に導入されるのに対して、値を持たずに派生に導入されるのが解釈不可能素性であると再定義された。完全解釈の原理により、解釈不可能素性は削除されなければその派生は破綻する。解釈不可能な素性の削除は、解釈可能な素性を持つ要素と一致 (Agree) の関係になり、その値を付与されることによって達成される。

- 11 先端素性とは誘引を駆動する素性で、Chomsky (1981) が（当時は I と呼ばれていた）T が義務的に指定部を持つことを要求する原理として提唱した EPP (Extended Projection Principle, 拡大投射原理) に端を発する。その後、Chomsky (2000) は、EPP を T のみならず、フェーズ主要部に拡張し、Chomsky (2007, 2008) において、先端素性として捉えなおされた。
- 12 議論の単純化および明瞭化のため、以下では当該議論に直接関係のない素性や、川本 (2019b) の第3節で述べた CP を分割した left periphery (TP の左側部分の構造) の表記を省略して議論を進める。
- 13 値が未指定のまま統語構造に導入された解釈不可能素性の値が決定することでその解釈不可能素性は削除されるとして、ここでは横線を施している。しかしながら、「削除 (deletion)」はその素性が完全に統語構造から「消去 (erasure)」されたことを意味するのではない。Chomsky (2001: 19) は “... deleted features remain visible until the strong-phase level ...” と述べている。つまり、削除された素性は強フェーズレベル内では依然として統語操作にとって可視的であり利用可能である。そして、Chomsky (2000: 131) が “Deleted features are literally erased, ... possibly at the phase level.” と論じているように、削除された素性はフェーズレベル、つまり CP や DP 単位で消去され、フェーズの外側からの統語操作には不可視、つまり接近不可能となる。
- 14 Pesetsky and Torrego (2001) も同様に、主格と時制素性の関連性を指摘している。彼らは主格に時制が現れる例として、以下のオーストラリア、クイーンズランド州周辺のアボリジニ言語 Pitta-pitta 語の例を挙げている。下記の例では主格 DP に未来時制が標識されている。
  - (i) a. Ngapiri-ngu thawa paya-nha.  
       father-FUT   kill   bird-ACC  
       ‘Father will kill the bird.’

b. Thithi-ngu                      karnta pathiparnta.

elder brother-FUT    go    morning

‘My elder brother will go in the morning.’

- 15 場所句や虚辞の *there* は完全な  $\phi$  素性を持たず、解釈不可能な人称素性として三人称を持っているが、数に関する素性を持たないと仮定する。
- 16 C の時制素性が解釈可能な時制素性から写し取った値を持つことで補文標識の融合が触発されるというここでの仮定は、その場限りの *ad hoc* な規定ではなく、T-to-C 移動の結果、解釈可能な値を持った T の時制素性が C に上昇したことで Do-support が起こること（4.3節参照）と並行的である。いずれも、C 内の時制素性が語彙的要素との付加を要求し、前者は補文標識を、後者は *do* の挿入をそれぞれ誘発することで起こる事象として捉えることができる。

#### 参考文献

- Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris.
- Chomsky, Noam (1995) *The Minimalist Program*. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2000) Minimalist Inquiries: The Framework. In: Roger Martin, David Michaels and Juan Uriagereka (eds.) *Step by Step: Essays on Minimalism in Honor of Howard Lasnik*, 89-155. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2001) Derivation by Phase. In: Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, 1-52. Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Chomsky, Noam (2007) Approaching UG from Below. In: Uli Sauerland and Hans-Martin Gärtner (eds.) *Interfaces+Recursion=Llanguage?:*

- Chomsky's Minimalism and the View from Syntax-Semantics*, 1-29. New York: Mouton de Gruyter.
- Chomsky, Noam (2008) On Phases. In: Robert Freidin, Carlos P. Otero and Maria Luisa Zubizarreta (eds.) *Foundational Issues in Linguistic Theory*, 133-166. Cambridge, Mass: MIT Press.
- Culicover, Peter and Robert Levine (2001) Stylistic Inversion in English: a Reconsideration. *Natural Language and Linguistic Theory* 19: 283-310.
- Den Dikken, Marcel (2006) *Relators and Linkers: The Syntax of Predication, Predicate Inversion, and Copulas*, Cambridge, Mass.: MIT Press.
- Doyle, Roddy (1996) *The Woman Who Walked into Doors*. London: Vintage Publishing.
- Henry, Alison (1995) *Belfast English and Standard English*. Oxford: Oxford University Press.
- Joyce, James (1992) *Dubliners*. Dublin: The Lilliput Press.
- 川本裕未 (2019a) 「LI 構文の派生とその理論的帰結 (1)」『大阪学院大学外国語論集』 第77号 .
- 川本裕未 (2019b) 「LI 構文の派生とその理論的帰結 (2)」『大阪学院大学外国語論集』 第78号 .
- McCloskey, James (1992) Questions and Questioning in a Local English, MS., University of California, Santa Cruz.
- McGuinness, Frank (2002) *Dolly West's Kitchen*. London: Faber and Faber.
- Pesetsky, David and Esther Torrego (2001) T-to-C Movement: Causes and Consequences. In: M. Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A Life in Language*, 355-426. Cambridge, Mass.: MIT Press.

## The Derivation of the LIC and Its Theoretical Consequences: Part 3

Yumi Kawamoto

The preposed locative phrase in a Locative Inversion construction (LIC) acts in the same way as the subject DP in a sentence in the following respects: First, the LIC locative phrase is not subject to *Do*-support, nor is the subject DP, when it is *wh*-questioned; second, neither of them is exempt from the *that*-trace effect so that either one is impossible to extract from a finite subordinate clause with the complementizer *that*; and finally, both of them exhibit asymmetries in the scope of operators, that is, the quantified object cannot take scope over the quantified LIC locative phrase just as it fails to have wide scope over the *wh*-questioned subject.

We show all of the traits observed above between the LIC locative phrase and the subject in common can be reasonably explained by assuming that the LIC locative phrase stops by at SPEC-T on its way to TopicP. In order to be valued and deleted, the Edge feature on C attracts either the *wh*-questioned locative phrase or the *wh*-questioned subject. Then, the uninterpretable Tense feature on C can dispense with attraction of T because it can check with the uninterpretable Tense feature which either the LIC locative phrase or the subject has received from T. As T-to-C movement does not take place, the finite T can avoid being stranded from the verb. Hence, no *Do*-support.

The uninterpretable Tense feature on the complement C in standard

English does not have the EPP property and therefore it can be deleted just by entering into the *Agree* relation with an element which has interpretable tense features. From the assumption that a complementizer, whether explicit or phonetically null, merges with C whose tense feature is valued as [Present] or [Past] and stranded from T, it follows that the extraction of the subject or the LIC locative phrase from the subordinate clause does not trigger a merger of a complementizer while the extraction of the object does.

If we assume the scope of operators is determined on the clausal level, that is, TP and CP, the scopal asymmetries observed between the subject and the LIC locative phrase on the one hand and the object on the other turn out to be again reflected by the fact that the former items both have moved into SPEC-T.



# Language Selection in Multilingual Speech Production

E. Russell Sanford III

## 1. Introduction

In the field of psycholinguistics there is a significant amount of research dedicated to investigating language selectivity in multilingual speech production, and although most of the work done in this area focuses on bilinguals, there have been several studies done on trilinguals as well. The ‘hard problem’ at issue with multilinguals is how they select the right word in one language and control the corresponding word in another language. In an English-Japanese bilingual, for example, how is “dog” selected over “inu” (or vice versa) in the production of speech? While lexicons in each language share a common conceptual system, they contain different lexical entries. The ostensible “problem” then is that there does not appear to be a problem of production; multilinguals are fully capable of speaking the languages in which they are fluent with little to no signs of “confusion.” Therefore, this logically necessitates a mechanism that can regulate the competition between languages in multilingual speech production.

Once this hard problem was established, the fundamental research question that arose was at what point in the lexical selection process the target language is selected. While researchers agree that there is competition between the components of the target language and the non-

target language when a concept needs to be expressed verbally, there is controversy pertaining to the locus of where the selection of the target language occurs (Schwieter 2007). However, there is a consensus that this locus of selection can occur in two possible places: at the semantic level or the lexical level. Corresponding to these proposed solutions are theories that make a case for each possible locus of selection. Prior to discussing these theories in multilinguals, it is useful to include a brief overview of how speech production is proposed to work in monolinguals.

## **2. Speech Production in Monolinguals**

It is typically only the shared traits between theories of speech production that prove to be relevant for theories of multilingual speech production, which tend to build upon the assumptions regarding speech production in general. There are nevertheless certain controversial concepts that emerged from the debate on monolingual models that are worth mentioning, notably the extent to which a model is discrete or interactive in nature. A discrete model, such as the one proposed by Levelt, Roelofs, and Meyer (1999), does not allow feedback and cascading activation to occur between stages, and there is no forward and backward spreading of activation between them. Interactive models, such as the one proposed by Dell (1986), allow the various levels involved in speech production to interact with one another in any direction. This is relevant because when a lexical entry is selected, components within the same level compete for activation, whereas in a discrete model activation from the lexical level would only feed down to the phonological level. In an interactive model the target concept spreads activation freely throughout the levels involved in speech production. The crux of the interactivity-

discrete debate, then, is in how activation flows through each of the levels involved.

Understanding the basic representation of monolingual speech production is vital in transitioning to bilingual models because while these latter models are principally focused on the competition between languages and the locus of language selection, they also address the competition that occurs within languages between activated lexical entries.

### **3. Speech Production in Bilinguals**

There are two main theories that provide an explanation for how competition is resolved between languages in the process of speech production. Both theories attempt to explain lexical processing in bilinguals and attempt to resolve competition through a process of activating the target language's words and suppressing the non-target language's words; where they differ, of course, is the level at which this process occurs (Schwieter 2007). The first theory is Green's (1986; 1998) Inhibitory Control (IC) model. This model proposes that selection of the target language is achieved through a process of inhibition at the lexical level, in which words in the non-target language are suppressed. The second theory is La Heij's (2005) Concept Selection Hypothesis (CSH). This theory argues that important "cues" during the preverbal stage determine which language is activated, with the locus of selection being at the conceptual level.

### **4. Inhibitory Control**

Green hypothesizes that lexical entries include "language tags" that dictate to which language they belong after the semantic system has sent

activation to both languages at the lexical level. Then, based on language tags, the non-target words are suppressed or “inhibited” to a degree that is proportional to the activation received by the target language with the “correct” tags. Because inhibition must be applied at a proportional degree to activation, it follows that more inhibition must necessarily be applied to the language in which the speaker is more fluent, the L1. Conversely, less inhibition would be applied to the language in which the speaker is less proficient because the inhibitory control mechanism is dealing with a smaller system. The way to test this hypothesis empirically is to measure reaction time in bilinguals as they switch in and out of L1 and L2 (Schwieter 2007).

The primary means by which Green’s theory has been empirically tested is through language switching trials involving two kinds of tasks: numerical-naming tasks and picture-naming tasks (Schwieter 2007). Meuter and Allport (1999) authored one of the most influential articles supporting Green’s theory, notably finding that reaction times were shorter when switching into L2 and longer when switching into L1 during numerical-naming tasks. However, not all studies confirm the hypotheses of the IC model regarding all bilinguals across the board.

Finkbeiner et al. (2006) used picture-naming tasks and numerical-naming tasks to test the validity of Green’s IC model. While their results on the numerical-naming tasks confirmed Meuter and Allport’s (1999) results, they notably found symmetrical switch costs in picture-naming tasks, contradicting the assumptions of the IC model. In addition, Costa and Santesteban (2004) found that asymmetrical switch costs occurred in low proficiency bilinguals, but in high proficiency bilinguals (specifically, Spanish-Catalan bilinguals) symmetrical switch costs were found.

While there are a host of potential explanations that account for the discrepancy in the results on picture-naming tasks (one could assign blame to the nature of the trials used to test inhibitory control), Costa and Santesteban (2004) provided an explanation that has proven to be influential and has continued to garner support among researchers. The authors raised the possibility that as the gap between L1 and L2 proficiency levels narrows, bilinguals will rely increasingly less on inhibitory control and more on a language-selective mechanism at the conceptual level (Costa 2005, Costa, Santesteban, & Ivanova 2006). Costa and Santesteban's (2004) work has led to a growing emphasis being placed on qualifying the degree of proficiency in multilingual participants in research, a variable that had hitherto been relatively ignored but has since been proposed as the key variable that determines a reliance on either an inhibitory control mechanism or a language-selective mechanism in bilingual speech production (Schwieter 2007). Thus, for higher proficiency bilinguals, La Heij's CSH may more accurately reflect their selection process.

## **5. The Concept Selection Hypothesis**

Unlike the IC model, the CSH does not require "inhibitory control" *per se*. In the CSH, only words in the target language are activated due to "higher linguistic cues" at the preverbal level, which puts the locus of language selection before lexical retrieval; this form of selection has been called "complex access, simple selection" by the author (La Heij 2005).

Like the IC model, the CSH does have empirical support, which has generally come from Bloem and La Heij (2003). Instead of relying on picture-naming and numerical-naming tasks, however, the authors were able to provide empirical support for their model by investigating the roles

of semantic interference and facilitation. More specifically, the authors attempted to isolate a variable that could induce semantic facilitation. In their experiment, Dutch-English bilinguals were shown a semantically related Dutch word or picture alongside an English word and instructed to ignore the related words and pictures and simply translate the English word into Dutch. The researchers hypothesized that the context words would impede backward translation because they would provide more competition at the lexical level. More importantly, however, their results confirmed their prediction that a semantically related context picture would facilitate backward translation because they would activate their representations at the conceptual level, eliminating the need for competition between languages at the lexical level. Therefore, the authors conclude, the locus of selection is at the conceptual level and preverbal cues are the mechanism by which the appropriate language is selected.

To date there have been no major challenges to the CSH, but Bloem et al. (2004) did find that if they manipulated the stimulus onset asynchrony (SOA) at which context words or pictures were shown they could reverse the effect of semantic interference and achieve semantic facilitation instead. While semantic interference occurred when a context word was presented alongside a target word to be translated, the authors found that if the context word was presented -200ms before the target, semantic facilitation occurred; they also found the same results with context pictures. Bloem et al. (2004) explain this by positing that the decay rate of activation for lexical representation is stronger than the decay rate of activation for conceptual representations. Therefore, because the conceptual level is still activated by the time the target stimulus is presented, the effect of a pre-exposed context word approximates that of a pre-exposed context picture.

These experiments ultimately help provide both a unified account of semantic interference and facilitation and further evidence that the CSH explains the language selection process in bilinguals. However, because there is empirical support for both the IC model and the CSH under certain conditions (e.g. proficiency levels), it is important to attempt to synthesize these two models and address the question of whether they are mutually exclusive.

## **6. The Proficiency Problem**

According to Costa and Santesteban (2004), the IC model does a good job of accounting for the language selection process in low proficiency bilinguals but a poor job of accounting for the process in high proficiency bilinguals. Therefore, they suggest that the process of language selection may be fundamentally different in low and high proficiency bilinguals. This is important for two reasons. The first is that, if this is true, proficiency level should be one of the main variables studied in the field of bilingual speech production, and more effort should be made to qualify and quantify the degree of proficiency of the bilinguals selected for research. Certainly no one would argue that there is not a high degree of variability in the proficiency levels of bilinguals, but few researchers prior to Costa and Santesteban have argued this was a relevant issue (Schwieter 2007). The second reason this finding is important is that it suggests that the two models are not mutually exclusive per se, but are each accounting for a fundamentally different process and thus are correct depending on the circumstance—namely, the type of bilingual being investigated.

## 7. Defining Bilingualism

One can easily imagine heritage speakers being fundamentally different from bilingual speakers who learned a second language in a classroom environment rather than a more organic cultural one. One can also imagine a scenario where a bilingual is equally proficient at speaking two languages but is superior at reading and writing in one language. It is possible that the term “bilingual” is used too liberally and doesn’t necessarily apply to those in the process of learning a second language (e.g., someone in their 5<sup>th</sup> year of study in a foreign language). Certainly, a variety of factors other than speaking proficiency—like age of acquisition, cultural identity, and relative aptitude at reading and writing—should play a key role in defining bilingual type.

Of course, there have been attempts to define bilingualism in the past. Bloomfield (1933) suggested that bilinguals were people who had a “native-like” control of two languages, but few bilinguals meet this standard. Weinreich (1953) defined bilingualism as the ability to alternatively communicate in more than one language, while Grosjean (1999) considers the every-day use of two languages a prerequisite for defining a person as bilingual. Recent studies suggest that it is essential to qualify not only the proficiency level of bilinguals, but also their histories and the sociocultural context in which their bilingualism manifests. Spanish-Catalan and Dutch-English bilinguals, for example, appear to be the gold standard in terms of “balanced bilinguals,” so they provide a good benchmark for the upper end of the bilingualism spectrum and exist in clear contrast with “dominant bilinguals” who are demonstrably more proficient in one language than another (Peal and Lambert 1962).

Further investigations on the role of proficiency in determining the

locus of language selection should consider the nature of the bilinguals being studied and attempt a categorical representation of the type of bilingualism under investigation. In addition, it may be useful to study trilinguals to further analyze the circumstances under which certain mechanisms regulate language selection.

## **8. Speech Production in Trilinguals**

Research on trilinguals has typically tested the assumptions of the IC model and the role the robustness of L2 and L3 plays in determining the reliance on inhibitory control. Results, however, have been mixed. Schwieter and Sunderman (2011) did find support for IC occurring in all three languages in their testing of English language learners of French and Spanish. However, they also found that only the proficiency level of L2 affected performance on all languages on picture-naming language switch tasks; L3 proficiency level only regulated performance on L3 switching tasks. While the researchers did not find support for Costa and Santesteban's (2004) theory of shifts from a reliance on IC to a language-selective mechanism with increases in proficiency, they suggest that a "threshold of lexical robustness" may exist that dictates a proficiency level at which this shift occurs, and argue that the participants in their study did not pass this threshold (Schwieter and Sunderman 2011: 409). However, the researchers also suggest that this threshold may only be possible for bilinguals and out of the reach of trilinguals, where three languages must compete for selection.

Linck, Schwieter, and Sunderman (2012) also found support for the IC model, but only when switching in and out of L1 and into the less proficient L3 from L1. Inhibitory control did not appear to be operating when

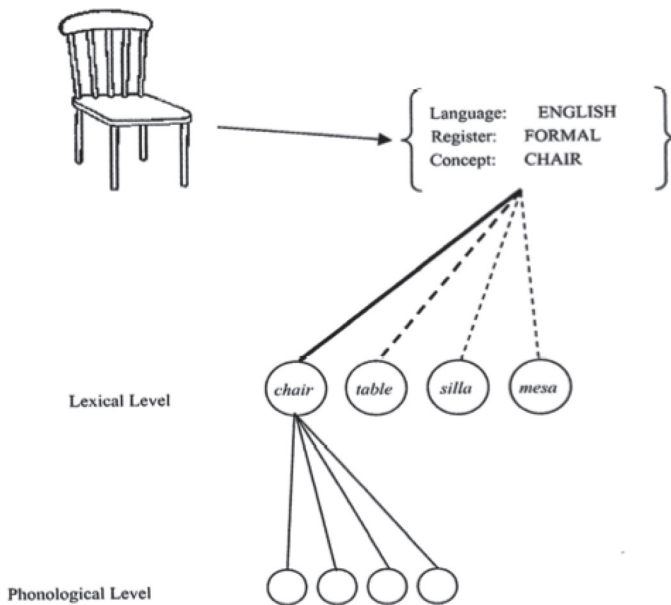
switching into L2. Their results suggest further qualifications on the conditions under which IC regulates language selection and provide additional support for the notion that proficiency level modulates the mechanism responsible for language selection.

## 9. Conclusion

While the two main theories investigated here—the CSH and the IC—each has their fair share of support, on a purely conceptual level they do invite criticism. The IC model, for instance, seems to adhere to a kind of circular logic. The absence of preverbal cues at the conceptual level places a great deal of responsibility on the part of the lexical level to regulate language selection, and the explanation that language tags alone can regulate the selection process may prove insufficient. The argument is that lexical items intrinsically have language tags that allow the lexical entries to demonstrate to which language they belong, and because of this the incorrect language is suppressed in proportion to the activation the language tags provide the correct language. This argument appears circular in nature, and essentially states that language tags regulate the process because they exist, and they exist because they regulate the process. Regardless of whether “inhibitory control” occurs, the IC model falters as a theory because it fails to consider the role of conceptual linguistic cues to inform the language selection process; this is a process which has been formulated to occur for components of speech production other than language selection, such as register, tone, etc. (La Heij 2005).

While conceptually the CSH appears to be more fundamentally sound as a theory than the IC, there is one potential logical inconsistency in the model itself, although minor. While the “complex access, simple selection”

description implies that there is no competitive selection process, the visual representation of the model seems to suggest otherwise (see Figure 1). This is because the visual representation of the lexical level depicts words from both languages (the target and non-target language) receiving activation from the conceptual level. The model explains that although some non-target language words are activated, only the target language is considered at this level. It may be useful to examine errors made by bilinguals in switching tasks and develop a modeling paradigm that attempts to parse out the degree of activation the target language receives versus the non-target language.



**Figure 1.** Lexical selection in La Heij's Concept Selection Hypothesis

Clearly, a great deal of future research needs to be devoted to investigating the conditions under which inhibitory control mechanisms and language-selective mechanisms occur. L2 and L3 proficiency levels may determine the shift from a reliance on inhibitory control at the lexical level to a language-selective mechanism at the conceptual level. To accomplish this, it would be useful to attempt to place pools of bilinguals used in research on a spectrum of bilingualism that takes into account cultural factors, age of acquisition, frequency of use of both languages, and proficiency at speaking, reading, and writing in each language. Until this is done, we can expect to see a large variability in the results obtained from studies on language selection in multilinguals.

#### References

- Bloem, I., & La Heij, W. (2003). Semantic facilitation and semantic interference in word translation: Implications for models of lexical access in language production. *Journal of Memory and Language*, 48, 468-488.
- Bloem, I., van den Boogaard, S., & La Heij, W. (2004). Semantic facilitation and semantic interference in language production: Further evidence for the conceptual selection model of lexical access. *Journal of Memory and Language*, 51, 307-323.
- Bloomfield, L. (1933). *Language*. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Costa, A. (2005). Lexical access in bilingual production. In J. F. Kroll & A. M. B. de Groot (Eds.), *Handbook of Bilingualism: Psycholinguistic Approaches* (pp. 308- 325). New York: Oxford.
- Costa, A. & Santesteban, M. (2004). Lexical access in bilingual speech production: Evidence from language switching in highly proficient

- bilinguals and L2 learners. *Journal of Memory and Language*, 50, 491-511.
- Costa, A., Santesteban, M., & Ivanova, I. (2006). How do highly proficient bilinguals control their lexicalization process? Inhibitory and language-specific selection mechanisms are both functional. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory and Cognition*, 32, 1057-1074.
- Dell, G. S. (1986). A spreading-activation theory of retrieval in sentence production. *Psychological Review*, 93 (3), 283-321.
- Finkbeiner, M., Almeida, J., Janssen, N., & Caramazza, A. (2006). Lexical selection in bilingual speech production does not involve language suppression. *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory and Cognition*, 32 (5), 1075-1089.
- Green, D. W. (1986). Control, activation, and resource: A framework and a model for the control of speech in bilinguals. *Brain and Language*, 27, 210-223.
- Green, D. W. (1998). Mental control of the bilingual lexico-semantic system. *Bilingualism: Language and Cognition*, 1, 67-81.
- Grosjean, F. (1999) Individual bilingualism. In B. Spolsky (Ed.), *Concise Encyclopedia of Educational Linguistics* (pp. 284-90). London: Elsevier.
- La Heij, W. (2005). Selection processes in monolingual and bilingual lexical access. In J. F. Kroll & A. M. B. de Groot (Eds.), *Handbook of Bilingualism: Psycholinguistic Approaches* (pp. 289-307). New York: Oxford.
- Levelt, W. J. M., Roelofs, A., & Meyer, A. S. (1999). A theory of lexical access in speech production. *Behavioral & Brain Sciences*, 22 (1), 1-75.
- Linck, J. A., Schwieter, J. W., & Sunderman, G. (2012). Inhibitory control predicts language-switching performance in trilingual speech production.

*Bilingualism: Language and Cognition*, 15, 651-662.

- Meuter, R. F. I., & Allport, A. (1999). Bilingual language switching in naming: Asymmetrical costs of language selection. *Journal of Memory and Language*, 40, 25-40.
- Peal, E. & Lambert, W. E. (1962). The relation of bilingualism to intelligence. *Psychological Monographs*, 76, 1-23.
- Schwieter, J. W. (2007). A psycholinguistic investigation of language selectivity in bilingual speech production. (Doctoral dissertation). Retrieved from Dissertation Abstracts International, (68, 3828).
- Schwieter, J., & Sunderman, G. L. (2011). Inhibitory control processes and lexical access in trilingual speech production. *Linguistic Approaches to Bilingualism*, 1 (4), 391-412.
- Weinreich, U. (1953). *Languages in Contact: Findings and Problems*. New York: The Linguistic Circle of New York.

## 多言語話者の発話産出時における言語選択

E. R. サンフォード

多言語話者は発話産出の際、どのように適切な言葉を選択し、何が言語間の競合を制御しているのだろうか。多くの研究がこの多言語話者による言語選択の「難題」、及び目標言語の選択過程において発生する複数言語間の競合の性質の解明に取り組んできた。発話産出過程において言語選択が起こる場所としては、語彙レベル、概念レベルという二つの可能性が挙げられている。現在、各レベルの代表的な理論として、Green による抑制コントロールモデル (IC) 及び La Heij による概念選択仮説 (CSH) がある。これらの理論は相互に排他的ではなく、言語選択が語彙レベルにおける抑制コントロールによるものか、概念レベルにおける言語選択メカニズムによるものかは、話者の言語運用能力によって決定されると言われている。



## 大阪学院大学外国語学会会則

- 第1条 本会は大阪学院大学外国語学会と称する。
- 第2条 本会の事務所は大阪学院大学図書館内におく。
- 第3条 本会は本学の設立の趣旨にもとづいて、外国語学、外国文学の研究を通じて学界の発展に寄与することを目的とする。
- 第4条 本会は次の事業を行う。
1. 機関誌「大阪学院大学外国語論集」の発行
  2. 研究会、講演会および討論会の開催
  3. その他本会の目的を達成するために必要な事業
- 第5条 本会の会員は次の通りとする。
1. 大阪学院大学・大阪学院大学短期大学部の専任教員で外国語学、外国文学を専攻し担当する者
  2. 本会の趣旨に賛同し、役員会の承認を得た者
- 第6条 会員は本会の機関誌その他の刊行物の配布を受けることができる。
- 第7条 本会には次の役員をおく。任期は2年とし、再選は2期までとする。
1. 会 長 1名
  2. 副 会 長 1名
  3. 庶務・編集委員 4名
- 第8条 会長は会員の中から選出し、総長が委嘱する。  
副会長は会長が会員の中から委嘱する。  
委員は会員の互選にもとづいて会長が委嘱する。
- 第9条 会長は本会を代表し、会務を統轄する。  
副会長は会長を補佐する。役員は役員会を構成し、本会の企画・運営にあたる。
- 第10条 会長は役員会を招集して、その議長となる。
- 第11条 会長は会務執行に必要なとき、会員の中から実行委員を委嘱するこ

とがある。

第12条 総会は年1回これを開く。ただし、必要あるときは会長が臨時に招集することができる。

第13条 本会の経費は大阪学院大学からの交付金のほかに、有志からの寄付金その他の収入をもってあてる。

第14条 各学会の相互の連絡調整をはかるため「大阪学院大学学会連合」をおく。

本連合に関する規程は別に定める。

第15条 会計は毎年4月1日に始まり、翌年3月31日に終る。

第16条 本会会則の改正は総会の議を経て総長の承認をうるものとする。

#### 附 則

1. この会則は、昭和49年10月1日から施行する。
2. この会則は、平成3年4月1日から改正し施行する。
3. この会則は、平成13年4月1日から改正し施行する。
4. この会則は、平成24年4月1日から改正し施行する。
5. この会則は、平成25年4月1日から改正し施行する。

以上

## 大阪学院大学外国語論集投稿規程

1. 投稿論文（翻訳を含む）は外国語学、外国文学に関するもので未発表のものであること。
2. 投稿資格
  - イ. 投稿者は、原則として本会の会員に限る。
  - ロ. 会員外の投稿は役員会の承認を必要とする。
3. 原稿は次のように区分し、その順序にしたがって編集する。論説、研究ノート、翻訳、書評など。
4. 原稿用紙は、本学の200字詰用紙を横書きにし、枚数は原則として80枚を限度とする。
 

ワードプロセッサ使用の場合は、A4判用紙を使用し、1ページを35字×27行とし、16枚程度までとする。

和文フォントとして「MS 明朝」、欧文フォントとして「Century」を使用する。

外国語文の場合は A4判用紙を使用し、5,000語程度までとする。

原則として、論文本文が日本語文の場合は300語以内の外国語文の、また本文が外国語文の場合は900字以内の日本語文の、概要を付ける。

外国語による論文および概要は、投稿前に当該外国語母語話者によるチェックを受けることが望ましい。
5. 投稿論文の掲載の可否は、2名の査読者による査読結果に基づき編集委員会で判断する。
6. 発行は原則として、前期・後期の2回とし、6月・12月とする。年間ページ数は300ページ以内とする。
7. 抜刷は40部を無料進呈し、40部を超過希望の場合は編集委員会で超過費用を決定する。
8. 投稿され掲載された成果物の著作権は、著作者が保持する。
 

なお、出版権、頒布権については大学が保持するため、論文転載を希望する場合は、学会宛に転載許可願を提出願うこととする。
9. 投稿された論文の著作者は、当該論文を電子化により公開することについて、複製権および公衆送信権を大学に許諾したものとみなす。大学が、複製権および公衆送信権を第三者に委託した場合も同様とする。

この規程は、2020年4月1日から適用する。

以 上

## 大阪学院大学外国語論集執筆要領

1. 原稿は最終的な正本とする。校正の段階でページ替えとなる加筆をしない。
2. 欧文は1行あきにタイプすること。
3. 邦文原稿の挿入欧文は、タイプもしくは活字体で明瞭に書くこと。
4. できるだけ現代かなづかいと当用漢字を用い、難字使用の時は欄外に大書する。
5. 印刷字体やその他印刷上のスタイルについては、編集委員に一任する。
6. 注はまとめて本文の末尾に置くこと。

インデックス番号は上つきとして通しナンバーとする。その他の書式については、会員が所属する学外の学会の規程に準ずるものとする。(例えば、英文原稿の場合は、*MLA Hand book for Writers of Research Papers* に準拠すること。)

7. 図や表の必要の場合は別紙に書いて1枚ごとに番号と執筆者名を記入し、本文中の挿入箇所を指示すること。説明文は別紙にまとめる。
8. 自分でスミ入れして完成させた原図や写真の場合は厚手の台紙にはりつけて、希望の縮尺を記入すること。
9. 執筆者校正は2校までとし朱筆のこと。2校以前で校了してもよい。
10. 次の場合は、必要経費の一部が執筆者負担となることがあるのでくに注意されたい。

ア. 校正のさい、内容に大きな変更は認められないが、やむをえず行って組換料が生じたとき。

イ. 特殊な印刷などによって通常の印刷費をひどく上まわる場合。

11. 原稿の提出期限は原則として9月末と3月末とする。
12. 原稿の提出先は編集委員あるいは図書館とする。
13. 原稿提出票を必ず添付する。原稿用紙と提出票は図書館事務室に申し入れる。

以 上

## 執筆者紹介（掲載順）

川 本 裕 未 外国語学部 教 授

E. Russell Sanford III 国際センター 講 師

## 編 集 後 記

世界中が新しいウィルスに脅かされている。識者によれば、人間はウィルスの生活圏に侵入しすぎたらしい。これまでひっそりと生きてきたウィルスが、人間との接触を余儀なくされている。ウィルスの側からしても、不本意にちがいない。未知のものがまだ数十万存在するともいわれる。

想像をはるかに超える影響があらゆる分野に広がり、本学でも急遽オンライン授業の態勢を整え、新入生を迎えることとなった。一度も学生の顔を見ることなく、授業を進めるという経験に、学生も教員も戸惑っている。機械越しの会話は、まどろっこしい。対面の授業によって、その場を共有するだけで、いかに多くの情報が行き交っていたかと、あらためて教室で行われる授業のありがたさを痛感している。

パンデミックとともに、インフォデミックという言葉も聞かれるようになった。巷間、様々な情報が飛び交うが、真偽不明のものも多い。言葉を扱う学問に携わるものとして、しっかり事の虚実を見極める術を、学生たちに伝えていかなければならないと思う。

原稿執筆時点では、まだ完全な終息の方向は見えない。一刻も早く日常が戻ることを祈りたい。

この状況の中、投稿いただいた執筆者の方々には御礼申し上げます。 (Y. O.)



---

大阪学院大学外国語学会役員

---

会 長 川本 裕未

副 会 長 山口 修

編集・庶務委員 黒宮公彦・中田辰也・安富由季子・吉村京子

大阪学院大学外国語論集 第79号

2020年 6 月20日 印刷 編集発行所 大阪学院大学外国語学会

2020年 6 月30日 発行 〒564-8511 大阪府吹田市岸部南二丁目36番1号

電話 (06) 6381-8434 (代)

発 行 人 川 本 裕 未

印 刷 所 大 枝 印 刷 株 式 会 社

吹 田 市 元 町 28 番 7 号

電話 (06) 6381-3395 (代)

OSAKA GAKUIN UNIVERSITY

FOREIGN LINGUISTIC AND LITERARY STUDIES

No. 79

The Derivation of the LIC and Its Theoretical Consequences:  
Part 3 ..... Yumi Kawamoto 1

Research Note  
Language Selection in Multilingual Speech Production  
..... E. Russell Sanford III 23

June 2020

THE FOREIGN LANGUAGE SOCIETY  
OSAKA GAKUIN UNIVERSITY